

優秀賞

祖母と私を繋いでくれたもの

皇學館大学教育学部 3年 仲田 衣里

祖母の家に行く道には、大きな上り坂があつて、幼い頃は祖母のしわくちな手を握りながら、ゆっくりゆっくり歩いた。

「これは、苦勞してきた手なんや。」

と、小さなすべすべの私の手を見て、祖母は恥ずかしそうに言っていた。私は祖母の手が大好きだ。その皺に、苦勞と一緒に祖母の優しさが刻まれているようで。

大学一年生の春、認知症が進行した祖母は、老人ホームで暮らすことになった。

私は母と一緒に、祖母を迎えに行き、老人ホームへ向かった。久々に会った祖母は、久しぶりのせいか、昔よりそっけない気がして、少し寂しくなった。

母が手続きを終え、老人ホームを去る前に、私は祖母に書いた手紙を渡した。すると、祖母は私の大好きなしわくちな手を瞼に当て、

「こんなの、泣いちゃうよお。」

と言った。私まで泣いてしまっそうだった。

私は大好きな祖母が変わってしまった気がして、本当は手紙を渡すのが少し怖かった。だが、祖母は私の大好きな祖母のままだった。きつと、祖母も緊張していたのだと思う。

祖母が老人ホームで暮らすようになり、数週間経った頃、祖母が私の手紙を、毎日老人ホームの皆に自慢していると母から聞いた。

祖母と私を繋いでくれたもの、それは言葉だ。

今まで祖母が私にくれたように、今度は私が祖母の手を取り、一緒に出掛けたい。しかし、新型コロナウイルスの影響により、直接手を触れることが難しくなっている。

では、言葉ならどうだろうか。実際に手と手を繋ぐことができない今の世の中でも、言葉なら、人の心と心を繋ぐことができる。

住み慣れた家から離れ、新しい環境で暮らす毎日は、祖母にとって、少なくとも不安があるに違いない。

今、祖母が一人で大きな上り坂を登っている。今、私が言葉の力で祖母を支えたい。